

統合保育における発達障害の子どもが抱える困り感 — 間主観的アプローチによる理解と支援の可能性 —

人間発達教育専攻
幼年教育コース
M11019I
平野敬子

【問題と目的】

近年、発達障害の子どもに対して統合保育が行われるようになってきている。それに伴い、幼稚園や保育所では様々な問題が起き、保育者、発達障害の子どもは、それぞれに困難を抱えるようになってきた。統合保育の難しさは、個々の障害の特性や発達状態や保育環境などから複合して生じると考えられる。様々な問題がある中でも、まずは、発達障害の子ども自身が抱える困難さを明らかにする必要がある。

例えば、発達障害の子どもがいきなりパニックを起す、みんなと同じ活動ができない等の問題が起こる。保育者が、それをただ、発達上の遅れ、偏りだと考えるなら、発達障害の子どもの困難はわからないだろう。発達障害の子どもには状況や指示が分からなかったのかもしれないし、やろうとしてもうまくできない不安が原因だった可能性もある。本当の原因が何であるかわからないと、適切な支援はされないだろう。そこで、本研究では子ども自身の困難を「困り感」として研究していく。

困り感は、その障害特性や周囲の不適切な関わりや無理解に起因したものとする。表出される行動や表情から、わからない・嫌だ・不安だ・怖い等という気持ちをくみ取って「困り感」として捉えていく。

では、困り感はどのようにして捉えられるのだろうか。本研究では、それを間主観的アプローチにより明らかにしていく。

① 自分の気持ちを表現することが難しい発達障害の子ども自身が抱く困り感を保育者や観

察者が敏感に察知する。

②保育者と観察者が捉えるものが異なる可能性があることから、インタビューにより共通理解を図る。③さらにこれらの一連の過程の背景にあるものをエピソード記述により分析検討していく。

本研究ではこのようにして発達障害の子どもが抱く困り感を明らかにしていく。さらに、子どもへの支援の方向性について考察することを目的とする。

【方法】

統合保育をしているA保育園とB幼稚園をフィールドとした。A保育園ではNちゃん（自閉症、2年保育5歳児）、B幼稚園ではK君（自閉的傾向、2年保育、5歳児）、S君（発達遅滞、1年保育、5歳児）を観察対象とした。観察期間は平成23年7月から平成24年10月。週に1回程度、フィールドに赴いて、関与観察を行い、エピソード記述により分析検討した。また、保育終了後に保育者にインタビューを行った。

【結果】

1. 嫌だと言えないNちゃんの困り感

Nちゃんは、当初、感覚過敏や見通しが立たない等の障害の特性、及び、難しい課題を迫る保育者のかかわりにより、不安や恐怖といった困り感を感じていた。その後、保育者はNちゃんの「嫌だ」と拒絶する困り感を受け止め、頑張っている姿を認めたり、緊張をやわらげる援助を行った。また、保育者がNちゃんが「嫌だ」と言えることを成長と捉えることにより、「嫌だ」と言えることが肯定的な意味をもち、自分の気

持ちを言葉で表出できる成長に繋がっていったと考えられる。

2. 伝わりにくいK君の困り感

K君は困っていても気が付かれにくい受動群の特徴を有していた。また、コミュニケーションや他者の気持ちが分からないなどの障害特性があるため、クラス全体的話し合いの場面や友達との関係において困り感が周囲に伝わりにくかった。保育者はK君の困り感を受け止め、分かりやすい視覚的、構造的な説明をしたり、友達との社会的スキルを提案したりしてコミュニケーションの支援や援助をしていった。このような支援が、友達との関係において、自分の気持ちを伝えたり、友達の気持ちに気付くことができるようになってきた。これらのことが、土台となって、K君は自分の気持ちを表現したり、自分で行動できるようになり、他者の気持ちを理解するという成長に繋がっていきと考えられる。

3. 言葉の意味が分からないS君の困り感

S君は、認知能力や信頼関係が築きにくいなどの障害特性のため、言葉の意味がわからないことからくる困り感を抱えていた。当初は、慣れない幼稚園生活や保育者の否定的な関わりなどから「怒り」や「不満」の困り感を表出していた。保育者はS君のわからない気持ちを受け止めることで、信頼関係を築き、言葉の「意味されるもの」を伝えていく援助をおこなった。その結果、言葉の意味を理解できるようになり、困り感は減少していった。また、言葉の意味を獲得することで、自分の行動を制御することにも繋がった。S君が保育者に受け止めてもらえると感じることで、間主観的な関係が成立し、保育者が伝える言葉の意味を獲得していくことが可能になった。

【考察】

本研究では個々の困り感を理解し、支援の方向を探ってきた。発達障害の子どもにはそれぞれ固有の「困り感」がある。それらが引き起こしている要因を見ていくことで共通の構造が見えてくる。3つのエピソードをまとめ、考察していくと、発達障害の子どもの困り感は図のように表される。

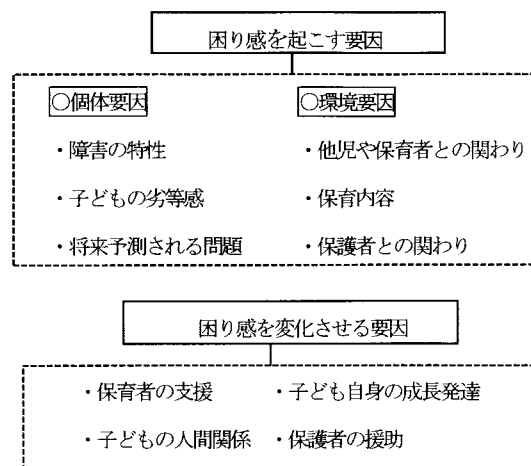


図 発達障害の困り感

このような困り感を間主観的に捉え、アプローチしていくことによって、次のような発達障害の子どもの理解と支援の可能性が開けると考えられる。①発達障害の子どもが抱く困り感は間主観的に捉えられ、原因や背景を分析することでより深く理解できる。②観察者と保育者が子どもの困り感を共通理解することで、支援の方向性を見出すことができる。③困り感の変化を成長として捉えることで、必要な援助と支援に繋がっていく。④発達障害の子どもが自分の困り感を保育者が受け止めてくれていると感じることで間主観的な関係がより深い水準で成立する。それが通路となり、有効な支援が可能になる。

主任指導教員 横川 和章
指導教員 石野 秀明